
ドラえもん のび太の銀魂

生時 (レジェンド)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもん のび太の銀魂

【Nコード】

N2327H

【作者名】

レジエン下
生時

【あらすじ】

ある日少年がバイクとぶつかり、記憶喪失に……その少年の名は野比のび太！だが彼は、自分は坂田銀時と言い出す。果たして彼は元に戻るのか？

第1章 のび太銀時！（前書き）

これはドラえもん＆銀魂の二次創作です^^
すでにブログでは4話載せています。

第1章 のび太銀時！

2009年6月某日……

少年は原チャリにはねられて、記憶を失った。

その少年の名は、野比のび太である。

某病院……

事故から三日後、彼の意識が戻った。

だが、目を覚ました彼は、普段ののび太じゃなかった。

「う、うん……ここどこだ!？」

ベッドの上で、のび太は何事もなかったかのように目を覚ました。

「のび太くん！気がついた!」

ドラえもんはのび太が目覚めてくれた事に、すごく喜んだ!

今はドラえもんとのび太の二人しかいないが、少し前まで、ジャイアンやスネオ、それに出來杉や静かが見舞いに來ていた。

またパパとママは1時間くらい前から、医者と大事な話をしている。

「ちょっと前まで、皆來てくれたんだよ」

「あ? 飲みすぎかな、狸がしゃべっている」

「のび太くん？」

ドラえもんは少し不安になりながらも、彼にメガネを渡した。

「あれ？俺、メガネしてつたっけ！？いや、メガネをしているのは、新八のはず……で、おい！なんだこの顔！俺、新八2号になってる！」

鏡を見て驚くのび太。

その時、医師と同時に、のび太の両親も病室へ入室してきた。

「パパ、ママ、のび太くんが……」

「ドラちゃん、実は……」

ママは小声でドラえもんに伝えた。

彼が記憶喪失だという事を……

「どうかね？のびくん……」

「あ？アンタ誰？ああ、アンタ昔、ジャプを貸してあげた大串君か？」

「私は君の主治医だよ。君の名前は覚えている？」

「あ？俺は坂田銀時だ」

「先生、まるでのび太じゃないみたいなんですけど……」

不安そうな顔で質問をするパパ……

「どうやら彼は、自分がアニメか漫画の主人公になったつもりなのでしょう」

医師は「病院よりもご自宅に戻って、普段の生活を送ったほうが、元の記憶が戻るかもしれません。」といい、のび太は次の日に退院した。

野比家……

「ここが俺のうち……」

「そう、2階が君の部屋で、押入れで僕が寝ているの」

「そうか！分かったぞ！お前、神楽だな！狸の着ぐるみなんて着て……」

確かに銀魂の神楽も押入れで寝ている。

三日後……

生活態度はのび太と同じマダオ（まるで ダメな 男）である。

「のび太くん！起きて！今日から学校に行くんだろう」

「ああ、うるせえな……もう少し寝かせてくれ300円あげるから」

だが、下の階からものすごい足音が……

ふすまを開け、

「起きなさい！」

と、大声で……

さすがののび太も目が覚めたようである。

「あのく、おばさん、俺病人らしいんだから、もう少し優しく頼むよ」

パパもママもドラえもんも、のび太の記憶が戻ってほしいため、心を鬼にして、普段と変わらない態度で、のび太と接する事にしたのだ。

第2章 カッコいいのび太はティオを想像すべし！（前書き）

カッコいいのび太は彼の息子ノビスケか、映画「太陽王伝説」に出てきたティオを想像してください！

第2章 カッコいいのび太はテイオを想像すべし！

学校……

学校側は、両親から、のび太の状態を聞いており、学校でも特別扱いはしないようにとママから伝えられていた。

のび太が教室に入ると、すでに生徒と担任の教師がいた。

「野比！遅刻だぞ！今回は病み上がりだから多めにみるが、次は1週間5年の男子トイレの掃除をしてもらうからな」

「トイレ掃除だ〜これじゃますます新八2号じゃん俺……」

「いやなら遅刻をしない事！いいな野比！（野比、早く元の野比に戻っておくれ）」

遅刻、居眠りなどは前ののび太と変わらない。

だが……

お昼休み……

のび太はジャイアンとスネオに呼び出された。

「のび太！俺の拳で、お前の記憶を戻してやるよ」

「あ？うるせ〜よ！ゴリラ！銀さんは忙しいのだから……ホントゴリラみたいなヤツはどいつもコイツも偉そうだな」

「行くぞ！のび太〜！」

「しゃ〜ない……来なさい！ゴリラタケシ君！」

「俺は剛田タケシだ〜！」

数秒後……

倒れていたのはジャイアンだ！

彼は性格だけでなく、強さまで坂田銀時となっていた。

「なかなかだったぜ！ゴリラタケシ君！お前ならもつと強くなれるよ！じゃあな〜」

「ジャイアン、大丈夫？」

「のび太……」

ジャイアンのその言葉を言ったときの表情はすごくさびしい表情をしていた。

帰宅後……

ドラえもんはジャイアン、スネオ、しずか、出来杉の四人を呼んだ。

「のび太くんは、もう坂田銀時というアニメの主人公になってしまった」

「お、おい！もう、戻らないのか？」

「分からない……」

「あいつ、普段は遅刻、居眠りなど今までと変わらないが、でもスキがない！これは、喧嘩のプロの俺の感だ！」

皆はとりあえず、のび太に合わせることにした。

何かの刺激で元に戻るかもしれないからだ。

また呼ぶ時も「銀さん」と呼ぶ事にしたのだ。

第3章 タイトルのび魂にしたら野比玉子の略じゃん！（前書き）

野比玉子って、のび太のママの名前です。

第3章 タイトルのび魂にしたら野比玉子の略じゃん！

野比家……

「俺って、めがねしてないし、銀髪で天パだと思っただが……」

「やあ、帰っていたんだね！」

「やあ、狸君！何か困っていたら、俺に言いなさい！」

「（今が一番困ってるよ）」

その頃宇宙では……

ある宇宙船が、一台の宇宙船に攻撃を仕掛けていた。

「姫！もうダメです！あの星へ逃げましょう」

「あの星に全てを任せましょう」

再び地球……

のび太が記憶喪失となってから、1ヶ月が過ぎた……

ドラえもんは、出来杉以外のメンバーと喫茶店にいた。

普段なら、空き地で野球でもしている頃だ。

だが、銀時のび太があまいものが食べたいという事で、喫茶店に入ったのだ。

彼らが店に入ってから、30分くらい経った頃……

ファンファン

と、サイレンの音……

どうやら、極悪な二人組みの銀行強盗が逃走しているようだ。

キキーツー！

と犯人はブレーキをかけた。

「どうする？もう車での逃走は無理だぜ」

「クソ！おい！とりあえず、ここの喫茶店の店員やお客を人質にしようぜ！」

カランカラン

と戸が開くと同時に、二人組みが入ってきた！しかも一人は拳銃を持っている。

店の中にいる者は、店員3名、お客はドラえもんたちを含めて、13人だ。

犯人は、人質たち全員に、床に伏せろと指示した。

だが、大丈夫！

ここには未来の猫型ロボット、ドラえもんがいる。

ジャイアンが

「頼むぞ」

と小声で伝えた。

だが、運が悪い……

四次元ポケットは朝、他の洗濯物と一緒に洗ってしまったのだ。しかもスペアポケットもつけてくるのを忘れている。

ジャイアンとスネオはドラえもんを睨みつけて、しずかは声を殺しながら泣いていた。

だが、一人だけ犯人の指示に従わない男がいた。記憶を失い、坂田銀時となったのび太だ！

「の、のび……いや銀時くん！」

ドラえもんが必死で彼の名を呼んだ。

「小僧！床に伏せろ！」

「悪いが、お前らのような馬鹿の言いなりになる気はない」

のび太は席を立ち、メガネを取った！

そしてドラたちは驚いた！

彼の普段の目は数字の3のような目をしているのに、今の彼の目は、真のサムライの目をしていた。

銀時は掃除箱のところに行き、ほうきを手にした。

「のび太さん、あれで戦う気じゃ……」

「見せしめに殺せ！」

「おう！」

「俺の近くで、声を殺しながら泣いていた少女がいた！その涙を見ちまった以上、俺は……いいか！俺の大切な仲間に出すヤツは、たとえ相手がライオンだろうと、警察だろうと、この物語の作者、アホの生時だろうと拳銃持った二人組みの強盗だろうと、関係ねえ！俺の大切な仲間に出すヤツは、俺がぶち殺す！」

「な、なんだアイツ……」

「やれ！」

「ク、クソ餓鬼が！」

パンパン

と銃声が店中に響いた。

だが、銀時は避けることなく……というより、弾のほうを避けたようにも見えた。

銀時は相手の懐に入り、数秒で強盗犯を退治した。

ドラたちは驚いた！

「あ、あれが今ののび太くん……」

その時、お客の一人がのび太に話しかけてきた。

「すみません！あなたのその力、貸してください！」

話しかけてきたのは、地球に逃げ込んだお姫様とその護衛の少年だった。

第3章 タイトルのび魂にしたら野比玉子の略じゃん！（後書き）

次回はあの侍が登場！

第4章 生時はマダオ好き！

バイクとぶつかり、記憶を失ったのび太……
しかも自分は坂田銀時だといっている。
だが、その強さは銀時そのものであった。

その頃ある場所では……

「銀さん、いつになったら記憶戻るのかな？」

新八と神楽が、桂スラと長谷川マダオに相談していた。

「銀ちゃん、前も記憶喪失になつてたアルな？」

「まあ、銀さんのことだ。ほっとけば元に戻るよ」

「して、その肝心の銀時はどうしている？」

「銀ちゃん、銀ちゃん！」

神楽の呼び声に、恐る恐る銀時が現れた。

「あ、あのどうもこんにちは……」

「確かにいつもの銀時ではないな？」

「だ、だから、僕はのび太何です」

「なんか医者の話では、源チャリで事故した時、記憶が失い、自分

がアニメか何かの主人公だと思っているらしいアル。どうせなら、ドラえもんと思いい込んでくれたほうがいいアル。のび太じゃく新八と変わらないね」

「な、何それ！僕とのび太くんに対して失礼でしょう！」

その時、天上からくノ一のさっちゃんが現れた。

「私は、銀さんがどんなになっても、銀さんを愛しています！」

「また、貴女ですか！う、嬉しいのですが、僕はのび太であって、銀時という人じゃないんです」

「あらあら、相変わらずにぎやかだね」

「姉上！」

新八の姉、妙は登場するなり、スマイルな顔で銀時の頭を殴った！

「あ、姉上！何を……」

「強い刺激を与えたら、元に戻ると思ったから……でもダメみたいね」

その頃真撰組の屯所では……

ある事件について、局長の近藤と副長の土方が談話していた。

「トシ、本当か！」

「ああ、山崎の情報では間違いない、ナース星のお姫様がこの地球に逃げ込んできたみたいだ」

といいながら、土方はタバコに火をつけた。

「ナース星ってどんな星なんですかい？」

爽やかな顔をして、質問してきたのは一番隊組長の沖田総悟だ。

「ナース星はかつては平和な星だった……だが、数年前、星の地上げ屋によって、ナース星は荒れ果てた星となった。そして、地上げ屋の社長が、ナース星のお姫様を気に入り、自分の女にしようとしたが、護衛たちと共に逃げだし、この地球に来ているらしい」

「ふん、そんなんですかい」

「ふん、当然、地上げ屋のやつらもこの地球に来ている！」

「上のものから、お姫様を探し、護衛しろとは言われていない……だがな、トシ、総悟！俺は女に弱い！星は違っても困っているのなら助けて！今回は真撰組の仕事じゃない！だから、俺一人でお姫様を守るつもりだ！」

「近藤さん！アンタが守るものは、俺たちの守るものでもあるんだ！そいつを忘れないでくれよ」

「そうですね」

「トシ、総悟！ありがとう！」

果たしてこの先どうなるのか？

第5章 入れ替えロープって道具知ってる？

ドラえもんたちのいる喫茶店……

強盗たちはすでに警察に連行されていた。

「なるほどね。要するに、アンタは変な社長さんにストーカーされているわけだ。分かるよ、その気持ち……俺も変なくノーストーカーされているもん」

ジャイアンが小声でドラとスネオに「くノ一って誰？」と聞いた。もちろん二人とも知るはずがない。

「お願いします！ 姫を守ってください！」

「安心なさい！ 俺の強さと、狸くんの四次元ポケットがあれば、無敵だよ！ あのドラゴンールの孫 空くらい無敵だ！」

「他の皆はどうしたんですか？」
とドラえもんは訪ねた。

「皆捕まりました。そして、運よく捕まらなかった僕は、姫様を守ろうと決めたのです。あつ、申し送れました。僕はマ・モールです。こちらが」

「ミーナです。よろしくお願いします。」
と姫は頭を下げた。

その頃「よろずや銀ちゃん」では……

「こちらの社長は、ナース星のミーナさんという方に命を助けられたため、ぜひお礼がしたいのですが、ナース星は今は荒れ果てた星になってしまったため、どうやら皆さん星を捨て、どこかに移住したみたいなのです。そして、我々の情報では、ミーナさんはこの星に逃げ……いや、この星にいるようなのです。」

「そうですか。それで僕たちにミーナさんという人を探してほしい……そういうことですね。」

「はい、お礼はたっぷりします。あっ、これが姫……いやミーナさんの写真です。ではお願いします」と言い、社長と付き添いの男は帰っていった。

「人探しなら新八だけで十分ね」

「えっ！いや、皆で探そうよ！」

「ぼ、僕も探しに行けばいいのですか？」

「あっ、銀さんはとりあえず、留守番してて下さい」

「はい」

「行くよ！定春」

「ワン！」

定春とは、よろずやで飼われている巨大生物である。

そして新八と神楽は、ミーナを探しに出かけた。

数分後……

「地球のどこにいるか分からないんじゃ、結構時間かかるかも……」

「おーい、新八！見つけたアル！」

「えっ！もう……まだ十分も経っていないよ」

「定春が見つけたアル向こうの喫茶店で写真に似た女、いたアル」

新八たちは喫茶店へ向かった。

「あれ、ここ今日強盗が入ったってニュースでいていた店だ」

「ほらあそこ、青狸たちと一緒にいるアル」

「ホントだ！」

新八たちは店の中に入っていた。

もちろん定春は大きいので中には入れない。

カラン

「いらっしやいませ！」

と、店員が言った瞬間、

「新八に神楽じゃないか！」

とのび太が叫んだ！

「誰アル？」

「さあ、どこかのアニメで見たことあるような……とにかくあの席へ行こう」

二人はドラえもんたちの席に近寄った。

「ミーナさんですよ」

「はい！」

「だ、誰だ！お前は？さては地上げ屋の一味！」

モールは懐から拳銃を出そうとしたその時、

「もうずいぶんと会ってなかったな」

そう言っつて、のび太が二人に抱きついた。

「あ、あのう、誰ですか？」

「俺だよ！俺！銀ちゃんこと坂田銀時！」

「ぎ、銀さん！？」

「銀ちゃんは家で留守番しているアル」

「そうか！分かった！」

と、ドラえもんが大声を出した。

「僕の持っている入れ替えロープみたいな事が、起きたんだ」

入れ替えロープとは、二人の人間が、ロープの先をそれぞれ持つことにより、魂だけ入れ替わる事が出来るドラの秘密道具である。

「つまり、ここにいるのは、姿はのび太くんだが、心はその、銀時さんという人なんだよ！」

「さすが青狸くん！」

「じゃあ、ホントののび太は……」

「家で留守番しているアル」

「二人に入れ替えロープを持ってもらえば、元に戻るよ」

「ふゝ、これで謎も解け、俺も元に戻る。んで、お前たち、何しに来たんだ？」

新八は社長からの依頼を銀時に話した。

「その社長は嘘を言っている」

「え？」

今度は銀時が、今までの出来事を話した。

「あの社長、今度会ったらぶっ飛ばしてやるね」

「まあまあ、今は家に帰って、びび太くと元に戻るのが先だ」

「びび太じゃなく、のび太くんです」
とドラえもんがつつこんだ！

銀時は自分の名を「金時」などと間違えられると怒るが、彼自身もよく名前を間違えている。

銀時たちは急いでよろずやに戻った。

だが、そこには銀時の姿をしたのび太はいなかった。
そして、テーブルには一通の手紙が置いてあった。

「よるづやのみなさんありとう。これいじょうみんなに目いわくか
けたくないからでていきます。のび犬」

「な、なんだ！この字は！」

「このミミズのような字、そして、間違えだらけの字、間違いない
！のび太くんが書いた手紙だ！」

「あのやろつ……」

その頃銀時の姿をしたのび太は……

「ドラえもん、パパ、ママ、しずかちゃん、皆……僕、どうすれば
いいの？」

と空を見上げ、彼の目から涙が流れた。

「あれダンナじゃありませんか」
と、いつてきたのは、沖田だ。

もちろんのび太は彼を……真撰組を知らない。

「珍しいですねい！ダンナが泣いているなんて」

「ぼ、僕は……」

「なんです？」

「なんでもない」

「総悟！どうした？」

「あっ、土方さん！ダンナの様子がおかしいんです」

「あゝ、そんなの前からだろう」

と土方がのび太のほうをみると、一台の暴走車が……

「お、おい！よろずや！前から車が！」

その言葉にのび太は振り向いた。

プツプツー！

そして……

暴走車はそのまま壁に激突し、のび太のほうはなんと、あの土方が助けたのだ。

「いてて……おい！よろずや！何ぼつつとしてやがる……ん？……あれ？俺か？……」

「す、すみません……あれ？……なんかまた違う人のような気が……」

…」

「大丈夫ですかい二人とも」

「そ、総悟！俺が、俺がもう一人いる！」

「ダンナ！なにいつてるんです」

「ダンナじゃね〜！俺は土方だ！」

「はあ………？」

総悟には何かなんだか分からなかったが、どうやら今度は、土方と、銀時の姿をしたのび太が入れ替わったようだ。

果たしてこの先どうなるのだろうか………

第5章 入れ替えロープって道具知ってる？（後書き）

え、現在、のび太は土方、土方は銀時、銀時はのび太の姿をしています！

第6章 「ポルターガイスト」の子役女優もクローン病（前書き）

銀魂とスケッチ・ダンスのコラボを書いたので是非読んでください

^^

第6章 「ポルターガイスト」の子役女優もクローン病

銀時の姿をしたのび太と土方の体が入れ替わってしまった。

「どうなってんだ？何で俺が万事屋の姿に……」

そっぴいなながら、頭を抱えながら歩き回る土方。

その頃のび太の姿をした銀時とその仲間たちは、また喫茶店に来て、今後について話し合っていた。

「これからどうするんだ？」

その時だった。

一人の男が彼らの前に現れた。

「お困りですか？」

「誰だ？てめ〜」

と、突つかかる銀時。

「私ですか。私は作者の生時しょうじです。しょうちゃんがいい」

生時……クローン病患者でネット作家。

格闘技が好きで少林寺拳法と空手を学んだ事がある（でも弱い）

好きなアニメは「ドラゴンボール」

好きな俳優はジャッキー・チェン、ブルース・リー

好きなミュージシャンはルナシー、マリスミゼル

好きな女性のタイプは「新・キューティーハニー」の如月ハニーである。

「また、てめ〜か！作者おまえこの前書いたスケット・ダンスのコラボにも出てただろう。どんなけ出たいんだ〜！」

「銀魂とスケット・ダンスのコラボを二作書いたので読んでね^^」
「宣伝しなくていいです」

と、眼鏡野郎に突っ込まれた。

「まあいい。そんな事より、お前作者なら、ビビ太の居場所知って
いるんだろう」

「のび太君です」

と、ドラえもんがツツコンだ。

「知っていますけどタダでは教えな〜い。金を払うから人の格闘家と
戦い勝ったら教えてあげよう」

「お前は占いババか！いいから教えろ！」

「……すいません。本当は言えないんです。小説家になろうの決ま
りなんです。第26条に作者はキャラに情報を教えてはいけないと
いう規則があるんです（嘘）」

「何！？チツ……それじゃ〜しょうがね〜」

「いや、絶対嘘ですよ」

と、眼鏡しんぼちがツツコンだ。

「メガ八君、作者の僕に逆らわない方がいいですぜ。作者だから何
でもできるんだぜ。例えばお前さんの中の人、リアル新八とも呼ば
れている坂口大助さんと体を入れ替えてやるか！」

「あんま変わんないんですけど……でもやめてください。あと、新
八です」

「あつ、いい事考えた。今から高杉とぶつかって、生時おれと高杉の体
を変えてみよう」

「おい〜、なに、ハタ皇子のアフレコ以上の嫌がらせしようとして
いるの」

と、眼鏡しんぼちが突っ込む。

「次の回から高杉生時として登場だ〜」

と、生時が外に出ようとしたとき、二人組の男たちが喫茶店に入ってきた。

「お前も物好きだな。下々の食生活が味わいたいなんで。おじさんは、こんなところより、キャバクラに行きたいんだが」

中に入ってきたのは松平と……将軍かよ！

そして生ちゃんは将ちゃんにぶつかってしまい、二人の体が入れ替わってしまった。

「高杉と入れ替わるつもりがよりによって将軍かよ！」

「ため〜誰にぶつかっているんだ？」

松平はそっくり、拳銃を生ちゃんの姿をした将ちゃんに向けて撃つた。

バキーン！！

と、店の中で銃声が響いた。

だが、のび太姿の銀時が蹴り飛ばしたおかげで、生ちゃんの体と将ちゃんの魂は助かった。

そして、生ちゃんの姿をした将ちゃんはこう言った。

「將軍家は代々……」

……

……

「なんも言わないのかよ！」

その時将軍がお腹を抱え苦痛を訴えた。

クローン病患者である生時の腸は狭窄が酷いため、時折激痛が襲ってくるのだ。

「余のお腹が痛い」

「ハハッ！将軍の将ちゃんよ。下々の食生活の味が知りたかったんだろう。とくと下々の苦痛を……この生ちゃんの苦痛を味わえ将ちゃん」

「やん」

「作者、ファンタ将軍に恨みでもあるんですか？てか、さつきから生ちゃん

将ちゃんとうるさいんですけど」

と、しんぼん童貞がツツコンだ。

「童貞で悪いか！」

「將軍家は代々、クローン病患者……だったのか」

「違いますから。ドラえもんさんお願いしますよ」

「うん。入れ替えロープ」

ドラえもんの入替えロープのおかげで二人は元に戻れた。

「お、おいドラ狸……何も激痛の時に元に戻さなくてもいいじゃないか」

「将ちゃんが苦しそうだったから……生ちゃんならなれているから大丈夫でしょ」

「フツ……まあ、俺にはこれがある。（パララパツパラ）痛み止め！」

生時はソセゴンという痛み止めを飲んだ。

「作者として、お前たちにこれだけは言っておく」

「な、何だ？」

「ポルターガイストというホラー映画はキャスト4人、監督1人が亡くなって呪われた映画と言われている。そして、その亡くなった1人に弱冠12歳で謎の死を遂げたキャロル・アン役を演じたヘザー・オルークも俺と同じクローン病だ（実話）」

「の、呪われた映画……」

銀時が震えながら逝った。

「おい、逝ったじゃね〜よ。言っただろう。俺まで殺す気か？」

「ハハツ」

「ハハツ……じゃね〜」

「あれ？將軍は？」

新八の質問に神楽が答えた。

「もうとっくに出て行ったアル。ていうか、私の出番今回これだけか？」

生時は神楽に殴られた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。……でも気持ちいい」

「何だコイツ」

店を出た松平と將軍。

「知らなかった。喫茶店というところは、下々の者が苦痛を味わうところであったとは」

「だからおじさんは、喫茶店こんちやどよりキャバクラの方がいいって言ったじゃんね？」

そう言つて二人は去つていった。

その頃、銀時姿の土方はある人とぶつかり、また入れ替わってしまった。

果たして、土方がぶつかった人物とは？

第6章 「ポルターガイスト」の子役女優もクローン病（後書き）

現在

銀時はこのび太

のび太は土方

土方は謎の人物

の姿をしています。

第7章 ミーナたちのこと忘れていませんよ

もう11月というのに、今だ暑い日が続く……

そんな中土方はある人物とぶつかり、体が入れ替わってしまった。

その相手というのは……
車のガラスで恐る恐る自分の姿を見る土方。
そして激しく驚いた。

「（おい、何で今度は桂の相棒のオバケペンギンなんだ!?!）」
そう彼がぶつかった相手とは、1人で散歩をしていた桂の相方、エリザベスであった。

「（いや、待てよ。これは使える……化けペンギンに成りすまし、攘夷浪士のアジトを付き止め、一網打尽にできる）」

「おい、エリザベス!こんなとこにいたのか!そろそろ帰るぞ」
「（よし。これで桂達はおしまいだ）」
だが、土方の読みは甘かった。
なぜなら桂は……

桂は……

ツラは……じゃない桂は……

「（ククツ、この化けペンギンの後を着いていけば、過激な浪士達を鎮圧できる。これでお妙さんは俺のものだ）」
そう、桂も体を入れ替わっていたのだ。
しかも真選組の近藤と入れ替わっているのだ。
二人はその後、数時間は動かなかった。

その頃、真選組の屯所では……
近藤や沖田など幹部達による会合が行なわれていた。

「本気ですか！局長」

「ああ、本気だ」

「ですが」

「これはもう決めたことだ。今まで攘夷浪士を敵視していたが、彼らは彼らなりにこの国を守ろうとしているんだ（フツ……最初はゴリラと体を入れ替わってしまい、どうなるかと思っただが、これは使える）」

「それより副長は一体こんな大事な会議に出てこないで、どこに行っただろう」

「ああ、そういえば、土方さん、訳の分からん事を言いながら、どつかいつちまつたな。土道不覚悟で切腹だな。ねえ近藤さん」

「近藤じゃない桂だ。あつ！……ま、まあ切腹は当然だろう」

この態度と言葉に沖田は半信半疑であった。

その頃土方姿ののび太は、銀さんたちがいる喫茶店近くに来ていた。土方の姿に気がついた新八は土方を店の中に入れた。彼に強力してもらったためだ。

だが、土方姿ののび太が周りを良く見ると、ドラえもんたちの姿が目映った。

「ドラえもん……」

「？」

「ドラえもん！……！」

と、大声で泣き、ドラえもんを抱きしめた。

「あのう」

「僕のび太だよ」

一同は驚いた。

「じゃ、じゃあ、てめゝは銀さんじゃなく、土方コイツの姿になっちまったのか？」

と、銀時が聞いた。

「はい」

「でもこれでのび太君だけでも元に戻るよ」

「はあ？何でよりによって、土方コイツと変わるんだよ。てか、俺の体はどこ行つたの？」

「あきらめなよ銀さん」

と、作者の生時が言った。

「お前まだいたのか〜！！」

と、銀時に蹴られる生時。

「ぶは〜……痛い。でもエクスタシー」

「ミーナ様、本当にこの方達大丈夫なんでしょうか？」

「し、信じましょう。この方達を……」

「まあ、野比玉子いや、野比魂になるか土魂になるか決めねばな。

イントネーション的には土魂の方がいいが、野比魂も野比玉子の略でいいぞ！あつ、お年魂トシマタマシなんてのもいいな〜」

「うるせえ〜！！アホ作者」

その頃、銀時姿のエリザベスは、さっちゃんとぶつかり、体が入れ替わっていた。

第7章 ミーナたちのこと忘れていませんよ（後書き）

現在

銀さんはのび太

のび太は土方

土方はエリザベス

近藤は桂

銀時はさっちゃん

となっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2327h/>

ドラえもん のび太の銀魂

2011年11月13日22時08分発行